**かくして供物巫女は地獄を産み堕とす　体験版**

　　　　　Ⅰ

――「そこ」へと通じる道は閉ざされたはずであった･･････。

　邪悪なるモノたちの巣窟である「淫獄界」は、性と欲と肉が渦巻く混沌とした場所であり、そこは汚れと穢れに満ちた汚濁の世界であって、不浄なるモノたちが棲息する「掃き溜め」であった。

繰り返すが、淫獄界に棲むモノたちは邪悪にしておぞましい。その性質は狂暴にして凶悪であり、残忍にして狡猾を極める。ゆえにというべきか、そこに棲むモノたちの姿形は言語に絶する。化け物であった。

　淫獄界に棲息する不浄なるモノたちの形態は、もはや想像は不可能に近い。人や蟲、獣、あるいは植物、爬虫類や軟体生物など、現世に住む生物にどこか近しい姿形をしているものの、その実態は似て非なるものとしかいいようがなく、表現された文言だけで描きだすことは、作画の技術が神の領域に到達しても難しいだろう。左右非対称の肉体、大きさ、四肢の数、それらの長さ、触覚器官や感覚器官の多様性、そして異常に発達した生殖器官の存在など、淫獄界に棲む不浄なるモノたちは、どこか歪で、生理的嫌悪感や根源的恐怖を掻き立てるような恐ろしい姿形をしているのである。なかでも特に恐れられている存在が「鬼」と呼ばれる人型の化け物であった。

この存在を思い浮かべるにあたっては、創作世界にて造形された想像を頭のなかに描きだすことがもっとも簡単な作業といえるだろう。人間を超越した巨体、規格外の筋肉、有する怪力、鋭い爪と牙、そしてなにより尋常でない性欲によって、「鬼」は種族として淫獄界の頂点に君臨しているのである。むろん、淫獄界には「鬼」よりもはるかに強力な不浄生物が多数存在しているが、「鬼」はある程度の知能と同族間での協調性が高いため、種族として淫獄界の頂点に君臨しているのであった。

　このような化け物たちがひしめき蠢く淫獄界を知るためには、まず成り立ちを原初まで遡る必要がある。

世界がまだ混沌としていた時代――「神」の手によって世界が形成された頃、「理の世」に不要なモノとして切り捨てられた性質が、ひとつにまとまり、受肉し、それが膿み、腐り、腐敗しながら形を成していき、増長と増大と分裂と増殖を繰り返しながら巨大化してゆき、やがてひとつの世界として独立した存在が「淫獄界」なのである。

そのような経緯によって誕生したがゆえ、淫獄界に光はない。生の温もりも、命の輝きも、さらには死の悲しみさえ存在しないのだ。ゆえに、次世代の命を育む存在――すなわち、牝がいなかった。つまり、そう、淫獄界に棲む不浄なるモノたちは、どれもこれも雄性の性質ばかりを保有しているのである。何百、何千万と存在する生命体のすべてが、一個の例外もなく雄――「男」ばかりなのである。

これがどれほど苦痛に満ちた世界であるか、雄性を有する生物であれば想像は容易いだろう。男しかいない世界など、面白みに欠ける。それはまさに色彩を喪った灰色の世界同様で――「地獄」でしかない。

　だからこそ淫獄界の不浄なるモノたちは、しばしば群れを成し、世界の境を超えて、雌を求めて現世に侵攻してくるのだった。溜まり出せぬ欲を吐き捨てるため、肉の味と温もりを喰らうため、そしてなにより雄としての本能を満たすため、淫獄界の不浄なるモノたちは、「女」を求めて現世へと攻めてくるのだった。

淫獄界の不浄なるモノたちの標的にされるのは人間の女が多かった。理由は単純で、人間の女は、全生物のなかでもっとも神に近しい形をしているだけでなく、もっとも美しく、もっとも知的で、なによりもっとも肉欲をそそる姿をしているからである。

女の肉体――唾液に濡れた口腔、弾力ある大きな乳房、柔らかな豊尻、きめ細かな肌、そしてなによりぬるぬるの淫穴は、淫獄界の生き物たちにとって垂涎の的であり、その穴にいきり勃つ自分の肉棒を挿入することだけを夢想して、淫獄界の生き物たちは無我夢中で攻めてくるのだった。

　むろん、現世への侵攻は、彼らにとっても危険を伴う。

　淫獄界の生き物は、基本、不死なる存在であるのだが、それは彼らの故郷のみ適用される律であって、「理の世」に一歩でも足を踏み込めば、その世界の法則が適用されることになる。すなわち、理の世で殺されれば、そのまま死ぬのだ。そしてその確率は、女を守ろうとする人間たちの反撃によってかなり高かった。

　しかし、淫獄界の不浄なるモノどもは、そのような危険を冒してでも人間の女を手に入れるべく死を恐れることなく攻めてきた。何度も、何度も、何度も何度も何度も何度も、まるで繰り返し押し寄せる津波のごとく何度も何度もだ。

　淫獄界の不浄なるモノたちの侵攻によって、多くの女たちが悲惨な目に遭い、無残な末路をたどったことは歴史の彼方に消えた歴とした史実である。股が裂けるほど巨大なイチモツを挿入されながら乳房を怪力で握りつぶされた若い女性がおり、尻穴を犯されて射精された大量の精液を口から吐き出しながら昇天した少女がいた。胎児ごと子宮を犯された妊婦がおり、熟れた巨乳を無数の触手で乳姦された熟女や、臍穴を拡張されて内臓を犯された女児などが、それこそ数えきれないほどたくさんいたのである。

　人智を超えた性欲の捌け口にされた女たちは、穴という穴をガバガバにされ、白目を剥きながら白濁の海に沈んで絶命していった。何人も何人も、何十人も、何百人も、何千人も、何万人も――それこそ、ひとつの王朝が傾くほどたくさんの女たちが犯し殺されたのであった。

　だが、現世で犯し殺された女たちはまだ幸せだった。死ねたのだから。悲惨だったのは「死」という概念が存在しない淫獄界に連れ去られた者たちである。淫獄界へと拉致された女たちは、死ぬことも許されないまま凌辱の限りを尽くされ、肉体がどろどろのぐちゃぐちゃになってもまだ犯し抜かれたのだから。

　むろん、淫獄界からの侵攻に対して、人間たちも手をこまねいているばかりではなかった。男たちは武器をとって戦い、時には美女を生け贄に捧げて時間を稼ぎ、淫獄界に巣食う不浄なるモノたちの油断を誘いながら時間を稼ぎ、反撃の一手を模索した。だが、思わぬ事態がきっかけとなり、淫獄界からの侵攻が途絶えることになる。ある日、国一番の霊峰が大噴火を起こしたのだ。

霊峰の大噴火によって国中が火山灰に覆われ、流れ出した大量の溶岩は麓にあった都を飲み込み、何十万という人々が逃げる間もなく死に絶えた。流出した溶岩は大量で、それは遠く海まで達し、地形を変えるほどだったという。この空前の大災害によってこの国最初の王朝は一夜にして滅びたが、不幸中の幸いというべきか、良いこともあった。

　霊峰の大噴火によって、淫獄界と通じていた「道」が物理的に閉ざされたのだ。しかも現世に残っていた不浄なるモノたちも、霊峰の大噴火に巻き込まれて死に絶えたため、なんと現世に平和が訪れたのである。この状況を唖然とすべきか、それとも呆然とすべきかは個々の判断に委ねられたが、とにかく、これは僥倖というべき幸事であった。

　都の消滅によって文明の軌跡が絶えたことにより、この国の人々は再び原始的な生活に回帰して狩猟採取生活からの再起を余儀なくされたわけだが、凶悪な上位生物から脅かされる生活に比べれば些細なことでしかなかった。

　時代の流れの速さは、いまも昔も変わらない。縄文、弥生、古墳と過ぎてゆき、飛鳥、奈良と刻まれてゆく。蝦夷に対する征伐があり、異国の地から大帝国が攻めてきたこともある。飢饉や疫病が流行し、大災害が起こって何千何万という人命が失われたことも一度や二度ではなかった。その間に、かつて存在した幻の王朝は存在ごと忘れ去られて、同時に淫獄界からの脅威も伝説に残るのみとなった。

　だが、世界の壁を越えた向こう側では、現世に対する――というよりは、女に対する執着を捨てきれぬモノたちが、塞がれた「道」をこじ開けるべく、気が遠くなるような時間をかけて掘り進んでいることに、人間たちは気づいていなかった。

「女ヲ抱キタイ、女ヲ犯シタイ、マタアノ肉ヲ味ワイタイ･･････」

その一心で、淫獄界の不浄なるモノたちは塞がれた「道」を掘り進んでいるのであった。

　そして、一万と千五百年の刻が過ぎ去った･･････。

　　　　　Ⅱ

　･･････この国でもっとも高い霊峰を仰ぐ山間に、その小さな集落は存在していた。村の人口はわずか五〇〇人ほど。名を「清条」というこの村につたわる伝承によると、村の先祖ははるか昔にこの地に住み着いて、時おり外部から血を入れつつ、一万年以上もの長い間、動くことなくずっとこの地で生活してきたということだった。

　山間ゆえ作物の実りはよくないが、それでも棚田には稲が育ち、村の周りには桑畑が広がっている。養蚕と並んで重要な村の産業は、川で採れる砂金と山で採れる水晶で、これを交易の産物とすることで銭や塩を稼ぐのだ。生糸は税として重宝されており、これを時の為政者に貢納することで、村は戦乱の世にあって永く平和を保っているのだが、むろん、それだけで、暴力がモノをいうこの時代を生き抜くことは難しい。ゆえに、村には独自の習俗があった。生け贄の文化である。そう、人の身命を供物として捧げるアレである。

　生け贄は「供物巫女」と呼ばれ、見目よい少女がその役目を背負わされ、捧げられるその日まで大切に育てられる。供物巫女に選ばれた少女は、すべての肉体労働から解放されて、栄養価の高い食物を優先的に与えられながら、美貌と肉体を美しく保つことに重点を置きながら生活することになる。そしてその「刻」がきたら、村を守るため、率先してその身命を捧げることになるのだ。

　その「刻」とは、時代や状況によって場合が異なる。日照りや疫病が流行した際には巫女の命が捧げられたが、盗賊の襲撃を受けたりした際は、巫女が自らの肉体を差し出して相手の獣欲を満たすことで敵愾心を削ぐことを目的とする場合もあった。村の安全や利益を守るため、為政者の側室になったり、子息に嫁いだりする巫女も、過去には実在した。ゆえに、供物巫女に選ばれる少女は、見た目の美しさと豊満な肉体が重要視されたのである。

　むろん、供物巫女に選ばれたすべての少女が悲惨な末路を辿るわけではない。供物巫女には任期があって、それは若さを喪う二十歳に設定されていた。巫女はだいたい一〇歳前後で選ばれるから、一〇年間なにごともなければ、役目を終えて普通の生活に戻ることも少なくなかった。

　現在、巫女としての役割を担わされた娘は、清条牡丹といった。村長の娘で、供物巫女に選ばれてから五年ほどが経つ。まだあどけなさが残る容姿は歴代随一と称されるほどの美貌を誇り、その肉体は年齢に似つかわしくないほど豊満だった。

　牡丹は小柄な少女であるのだが、その乳房は大人の頭よりも大きく、張りがあり、安産型の極地というべきお尻は、でっぷりと大きく、柔らかな豊尻であった。肉体の発育がよいのは栄養価の高い食物を優先的に与えられているからであるが、むろん、ほかにも理由がある。

　実は、牡丹の母も、祖母も、曾祖母も、代々供物巫女として選ばれてきた女性たちなのである。先に述べたように、供物巫女には優れた美貌と肉体の持ち主が選ばれる。つまり、牡丹が巫女として優れているのは、環境よりもむしろ遺伝に依るところが大きいというわけだ。

母や祖母たちは、幸いなことに、ここ百年ほど村が平穏だったため、贄として捧げられることなく二十歳を迎えることができた。牡丹が供物巫女としての役目を担う期間は、まだ五年ほど残っているが、母たちのように何事もなければ、無事、普通の生活に戻ることができるはずである。たとえ本人に身命を捧げる覚悟があったとしても、だ。

　牡丹の家族や周りの者たちは、それを願ってやまない。

　だが、運命とは残酷なもので、そうはならなかった。

　淫獄界からの干渉が――不浄なるモノたちの執念の努力が実り、閉ざされていたはずの「道」が、再び開通してしまったからだ。

　一万と千五百年ぶりの、厄災襲来だった。

　　　　　Ⅲ

　･･････遠くに見晴らす国一番の霊峰の山頂には、白く積もった雪が見えた。残り雪である。季節は穏やかな春から暖かな夏へと向かいつつあり、清条村の棚田には稲が青々と育っており、桑の木には蚕の餌となる独特な形状をした葉が健康的に育っていた。

　清条村の中央を流れる川は雪解けによって豊富な水量を誇っており、大きなヤマメやイワナが泳いでいる。川岸には天然の山葵が自生しており、子どもたちが遊びながら蟹を取っているすぐ横で、大人たちが腰をかがめながら砂金を採っていた。この砂金は貢納品として献上されたあと、甲州金という貨幣に鋳造されて軍資金として活用されることになる。

　村の命脈ともいえるこの川の上流に、供物巫女として選ばれた娘が暮らす社があり、その一角に水垢離（みずごり）をおこなう神聖な場所があった。水垢離とは冷たい水で身を清め、心身を整えることで穢れをとりのぞく行為のことである。

　供物巫女に選ばれた娘が水垢離をおこなうその場所は、山から湧きでる水を蓄えるため人工的に造られた水場であり、周囲には自然を損なわぬ形で樹木や岩などが配置されていた。これは不届き者が外から覗き見できない工夫である。

　水垢離場を満たす湧き水は、山の地層で何千年にわたって濾過されてきただけのことはあって、一切の不純物が存在しない透明度を誇っている。その綺麗さといったら、それなりの水深があるにもかかわらず、底に敷き詰められた小石を水面からでも数えることができるほどだった。

そのほとりに、ひとりの若い少女が立っていた。白を基調とした薄い修験装束を着たその娘は、見る者をぞくりとさせるほど美しく、非の打ちどころがないほど完璧な美貌を兼ね備えていた。まだ幼さが残る小さな顔には、細い眉と、黒真珠を彷彿とさせる大きな瞳、愛らしい小さな鼻と、花弁のような唇が芸術的な比率で配置されており、凛とした表情と相まってこの世のものとは思えぬ美しさを醸しだしていた。背丈は低く、目算でおよそ四尺半（およそ一三五センチメートル）ほどしかないが、華奢な手足は繊細な工芸品のようにしなやかであり、きめ細かな白い肌にはシミどころか汚れひとつ存在しない。漆黒を彷彿とさせる長い艶髪を後ろで束ねており、目には見えぬ神聖な気配を全身から漂わせているかのようであった。

だが、娘の特筆すべき点は、美しい顔でもなければ華奢な手足でもなく、ましてや漂う気配や神聖な雰囲気でもなかった。娘の特筆すべき点――それは、視覚から飛び込んでくる驚異的な肉体の特徴であろう。

　大きいのだ。乳が、尻が、否、両方ともが、とにかく、この世のモノとは思えぬほど、現実離れした大きさを誇っているのだ。

　娘の胸には両手でも抱えきれぬほど大きな乳房がずしりと重く実っており、その存在感といったら圧倒的というほかない。大きい、とにかく大きい。まるで摂取した栄養のすべてが両方の乳房に詰まっているとしか思えないほどの巨大さであり、巨乳や豊乳といった言葉では表現できないほど大きな乳房が、見る者の視線を釘付けするかのようにぶら下がっているのだ。世が世なら、乳神様として祭られてもおかしくないほどの大きさである。

だがそれは娘を前方から直視した感想であって、後ろから目の当たりにすれば、また別の感想を抱くに違いない――否、間違いなく抱くだろう。

圧倒的な存在感を放つ大きな乳房と同様、娘のお尻もまた脅威的なまでに大きかった。それは安産型の極地ともいうべき大きさであり、骨盤からして存在感を主張してくるほどむっちりとしていて、そのお尻が、後方に突きだす形で、見る者の目にどっしりと飛び込んでくるのである。あまりの立派さゆえ、信心深い人間であれば尻神様だと伏して拝んでしまうかもしれない。

繰り返しになってしまうが、乳房にしても、臀部にしても、娘のそれはとにかくでかい。とにかく大きい。人並外れているというよりは、人外じみた巨大さというほかないほどで、身体が小さい分、余計に大きさが際立つ。

　ゆえにというべきか、両方ともあまりにも大きすぎるため、着ている修験装束はあまり意味をなしておらず、ところどころ肉がはみだしてしまっていて半裸に近い。なまじ布地が薄い分、まだ入水していないのに、薄桃色の乳首やお尻の輪郭がうっすらと透けてしまっているほどである。これで水に浸かれば、薄地はぴたりと肌に張りついて、もはや全裸と大差ない姿になること間違いない。

　すでに述べたことであるが、娘の肉体のこの脅威的な発育の良さは、栄養価の高い食べ物を優先的に与えられているからであるが、むろん、それだけではない。彼女の母も祖母も曾祖母も、美人で豊満な肉体の持ち主だったからである。つまり、彼女の肉体の驚異的な発達は、遺伝に依るところがかなり大きいのだ。

　そう、この娘こそ、当代供物巫女に選ばれた清条牡丹であった。水場の淵に立っているのは、一日二回おこなう水垢離をするためであって、まさにいま、精神を整えて、冷たい水のなかへと一歩を踏み出そうとしているところなのだ。

「ふーっ」

そう深く息を吐き、清らかなる水面にむかって一歩を踏み出そうとしたその刹那――後ろから彼女を呼ぶ声がした。

「牡丹さま、牡丹さまーっ！」

あきらかに慌てているであろうその声が耳を叩いたので、牡丹は踏みだそうとしていた足を止めた。それから、凛とした面差しを無言で後ろに向ける。視界に飛び込んできたのは、慌てた様子で走ってくる若い娘の姿だった。牡丹の身の周りの世話を仰せつかっている桔梗という娘が、こちらに向かって走ってきているところだった。

「桔梗、なにをそんなに慌てているの？　少し落ち着きなさい」

「も、もも、申し訳ございません！　お、長さまより、すぐに牡丹さまを連れてくるよう申し付けられたものでして･･････」

「父上が？」

牡丹は少し驚いたような顔をした。それから、すぐになにかを察して、彼女は表情を引き締めた。

「父上がわたしを呼ぶということは、なにか変事があったのですね」

「わ、わわ、わかりません。た、ただ、先ほど御館さまの使いの方が来ておられまして、その方が帰ったあと、すぐに牡丹さまを連れてくるよう申し付けられた次第でございます･･････」

　それを聞いて牡丹はますます表情を引き締めた。御館さまとは、この地一帯を治める為政者の敬称である。その人物の使者がきたということは、なにか大変なことがあったに違いなかった。

「わかりました、すぐに向かいます。着替えますので手伝ってください」

「は、はい！　わかりました！」

牡丹は踵を返しながら思った。

（ついに供物巫女としての大義を果たすときがきたようですね）

と。

　･･････牡丹の予感は正しかった。生家に戻った彼女は、そこで「鬼」が復活したという話を聞かされたのだ。父の推測によると、その「鬼」とは、村に伝わる「不浄なる世界」からやってきた化け物であるに違いないということだった。

　その推測が正しいかどうかは不明だが、現れた鬼たちが人にとって脅威だったのは確かである。

　村に来た使者の話によると、鬼たちは霊峰の麓より突如として現れ、そして、周辺の町や村を襲って暴虐の限りを尽くしたというのだ。

鬼たちは田畑を荒らし、家屋を破壊し、家畜を喰らいながら抵抗する者たちを容赦なく惨殺して、子どもを生きたまま引き裂いて血を飲み干し、泣き叫ぶ女たちを嗤いながら犯し殺したのだそうだ。鬼たちの猛威はすさまじく、たった半月で三十を超える村落が壊滅し、つい先日には、城がひとつ落とされて、そこが鬼たちの拠点にされてしまったのだという。

「間の悪いことに、御館さまはいま、軍勢を率いて信濃を攻めているそうで、とてもではないが鬼退治は難しい。そこで少しでも被害を減らし、時間を稼ぐため、苦渋の決断として人柱を送ることになったそうだ」

「その人柱に、わたしが選ばれたのですね」

父親が言うよりも早く、すべてを察した牡丹が言った。

そしてそれは正解だった。

「･･････そうだ。すまぬ」

厳格な顔に浮かぶ苦渋の表情が、父親としての心境を物語っているに違いなかった。

牡丹は大切な娘だ。

本心としては人柱などにしたくないに違いない。

しかし、村長としての立場が、そして先祖伝来の警句が、二重の楔となって彼に私情を挟むことを許さなかったようだ。

　それにいまは戦国の世だ。強大な勢力の庇護下になければ、小さな村など平穏を保てない。村を守るためには、要請に従って娘を差し出す以外、ほかに道はない。個より全を優先することは、この時代を生きる者たちの宿命である。供物巫女として選ばれたならなおさらだ。しかし、だからといって、いざその刻がくると躊躇わずにはいられない。それが親心というものだから。

　そんな父親の心境を察してか、牡丹は必要以上に明るく振舞った。顔に笑みを浮かべ、今生の別れになるであろう父親に向かって柔らかな声質を贈ったのだ。

「父上、心配に及びませぬ。この牡丹、供物巫女として選ばれたその日から、世のため人のため、そしてなによりこの村のため、この身を捧げる覚悟で生きてきました。ゆえに、こたびの勅命を天啓と思い、巫女としての役目を果たす所存でございます。ですから、どうか気を病まないでください」

　巫女としても人としても立派な台詞を娘に吐かれて、父親は思わず目頭を押さえた。内側より込み上げてくるものがあるようで、ぽたり、ぽたりと、涙が畳の上に落ちた。

　そんな父親を慰めながら、牡丹の表情はすでに鋭くなっている。

　それは間違いなく、決意の面差しであった。

　　　　　Ⅳ

　･･････霊峰の麓から突如として「鬼」たちが現れたのは、春の田植えがひと段落した五月下旬のことであった。現れた「鬼」たちを見て、人々が「ソレ」を「鬼」と認識できた理由は至極単純である。神社や寺院に飾られた画に描かれている「鬼」の姿に、現れた「ソレ」らがそっくりだったからだ。

現れた鬼たちは様々だった。熊よりも大きな個体から子どものように小さな個体まで、身体の大きさ、体格、搭載されている筋肉の量、肌の色、生えている角の数、骨格の形状など、体型や容貌はそれこそ千差万別であったが、いずれの個体にも種族として共通している点があった。

　それは表情である。鬼たちはどの個体も顔に残忍な笑みを浮かべており、口角の端を吊り上げて鋭い牙をのぞかせながら、常にニタニタ笑っているのだった。それはこの世のモノとは思えないほど恐ろしい形相の笑顔であって、見る者を本能的に恐怖させずにはいられなかった。

　その恐ろしい笑みに裏づけされているかのごとく、地の底より現れた鬼たちによる襲撃は凄惨を極めた。鬼たちが現れてから半月ほどの間に三〇を超える村落が襲われ、そこで殺戮の嵐が吹き荒れたわけだが、その内容がどれも尋常ではなかった。

鬼たちに襲われた者たちは、怪力で身体を八つ裂きにされたり、手足を千切られて殺されたりしたのだが、その者たちはまだ良いほうで、もっと悲惨な殺され方をした人間がたくさんいたのだ。

生きたまま樹木に串刺しにされる者、生きたまま腹を裂かれて内臓を食べられる者、生きたまま頭蓋骨を砕かれて脳みそを啜られる者が相次いだのだ。喰われる者はだいたい子どもや赤ん坊だった。子どもや赤ん坊は、身は少ないものの、肉も骨も柔らかく、血も新鮮で、煮ても、焼いても、さらには生でも、どんな方法で食べてもたいへん美味だったからである。男や老人は、喰うに値しないとされて雑多な方法で殺されたが、殺される前に自分の子どもや孫が生きたまま喰われる姿を見せつけられたので、大半の者たちが発狂しながら死んでいった。

　だが、鬼たちに襲われた者のなかでもっとも悲惨な運命をたどった者は、若い女性やまだ未成熟な小さな娘たちだった。鬼たちにとって男や老人は、喰うか殺すしか価値のない存在だったが、女たちにはそれ以外にも「性欲の捌け口」としての価値があり、そしてそれこそが、鬼たちが現世に侵攻した最大の理由であった。

　鬼たちは恐怖に怯え震える女たちを掴むと、着物を脱がせて裸にし、真っ赤な舌で小さな乳房やアソコを舐めまわしながら、怯える彼女たちに大木のような肉棒を見せつけた。人間の男のソレとは比較にならぬ大きさの肉棒を目の当たりにして、女たちは狂ったように泣き叫んだが、それは鬼たちの性欲を向上させる調味料にしかならなかった。

鬼たちは、泣き叫び悲鳴をあげる女たちの絶叫を聞いてさらに残忍な笑みを顔に浮かべると、硬く怒張した肉棒を震える女たちの股間に近づけて、処女も非処女も関係なく、有無を言わさぬ一撃でもって強引に挿入したのだった。

　股が裂ける音がして、肉棒が埋もれる音がした。

　メリッ、メリメリメリッ、メリメリミヂィィィィ･･････ッッッ！

　ズブズブズブドオオォオオォオォオォオオォォォ･･････ッッッ！

「うぎゃあああぁあああぁぁぁあぁぁあぁあぁぁッッッ！」

「ひぎゃあぁあぁあぁぁあぁぁあぁあぁああぁぁッッッ！」

「んぎゃああぁあぁあぁあぁあぁあああぁぁぁぁッッッ！」

　女たちの口から異口同音の悲鳴があがり、絶叫がほとばしった。大木のような肉棒を挿入されると、女たちの股が裂け、腹が肉棒の形に大きく盛り上がり、内臓が圧迫されて、この世のモノとは思えぬ激痛が女たちを襲った。中には白目を剥きながら狂ったように暴れる女もいたが、女たちの非力な抵抗など、鬼たちの怪力のまえでは蟻の抵抗に等しく、鬼たちから逃げることはできなかった。

鬼たちは愉悦の笑みを浮かべながら女たちを犯すことを愉しんだ。なにせ一万年ぶりの牝の肉穴だ。剛直に絡みついてくる肉の感触を堪能しながら、鬼たちは容赦なく突いて突いて突きまくり、そして無慈悲に射精していった。

ドビュルッ、ビュルルルルルルルルルッッッ！

ドビュッ、ドビュッ、ドビュルルルルルルルッッッ！

鬼たちの大量射精によって女たちの腹は一瞬にして妊婦のように膨れあがった。量といい、勢いといい、人間の男のソレとは比較にならない。結果、女たちの脆弱な肉体は鬼たちの大量射精には耐え切れず、膨らんだ腹が破裂したり、逆流した精液が口から噴き出すなどして、鬼に犯された女たちは次々と命を落としていった。なかには一度の射精で死なず生き延びた女もいたが、鬼たちは死ぬまで女を犯したため、結局、鬼に犯された女が生き延びることはできなかった。

女たちの死を鬼たちは残念がったが、しかし落胆はしなかった。現世にはまだまだたくさんの女たちがいることを彼らは知っていたからである。かくして村や町が次々と襲われて、被害は拡大の一途を辿った。

　鬼たちの襲撃に対して、むろん、人間たちも手をこまねいているばかりではない。鬼たちの襲撃に対して、村人たちは武装して立ち向かったし、守護を任されていた武将は兵を率いて戦ったりした。が、人間のささやかな抵抗など、鬼たちにとっては羆に歯向かう鼠のごとく無駄な抵抗でしかなかった。

　鬼たちに立ち向かった村人たちはことごとく殺された。討伐に向かった部隊も、百人単位の死者を出して壊走した挙げ句、立てこもった城を落とされて乗っ取られてしまった。陥落した城内では凄惨な殲滅戦が展開され、生き残りの者によってその残酷な内容が報告されると、留守を任されていた家臣たちは青ざめて戦慄せずにはいられなかった。

　数はともかくとして、力といい、強さといい、狂暴性といい、鬼たちの武力は想像を絶する。これを退治するには生半可な兵力では難しく、万単位の兵力が必要となるだろう――それが対応を話し合った家臣たちの結論だったが、不幸なことに、彼らの主君は軍勢を率いて国を留守にしており、不在だった。報せによると、信濃の国で宿敵と対峙しているとのことで、どうにも動けないという。そのため留守を任された家臣たちは自力でこの事態に対処するしかなかった。

「御館さまが戻られるまで、まずはこれ以上の被害が出ぬようにすることが先決だ」

「報告によると、鬼たちの目的は女だという。女を襲っている間は、それに夢中で被害の報告はない」

「意志の疎通が可能であれば取り引きするのはどうだろうか？　できるならすべきだと思う」

「女を人柱として差し出すのか？」

「やむをえんだろう。これ以上の被害をださぬためには必要な犠牲だと思うしかない」

というわけで、議論がまとまった。鬼たちが占拠している城に決死の使者が派遣され、交渉がおこなわれた。相手が人外ゆえ、当初は交渉など不可能ではないかとも思われていたのだが、意外にもあっさりと話しがまとまって、女を差し出すことと引き換えに、これ以上、村や町を襲撃しないことが決まったのである。むろん、これは破ることを前提とした講和であったが、最初から決裂するよりははるかにましだった。

鬼たちとの間で講和が結ばれると、さっそく、贄として差し出される女たちが国中から集められた。その数は一〇〇人を超えた。鬼たちに差し出される女は、若く、また見目よい娘たちばかりが選ばれた。鬼たちが少しでも喜んで油断するよう、厳選された娘たちが集められたのである。

　女たちを集めるにあたって、むろん、すべての事がすんなりと運んだわけではない。親たちの抵抗は少なからずあったし、恋人や許嫁と逃げようとする女もいた。ゆえに厳しい対応がとられ、斬首や磔によって殺された者は数十人に達した。混乱なく生け贄を差し出したのは清条村ぐらいであろうか。

　集められた女たちが、家畜のように荷車に乗せられて、牛に引かれてガラガラと運ばれていく。周りを武装した兵たちが二重三重と包囲しているため、女たちがこの場から逃げ出すことは不可能に近い。それゆえ、荷車からは、絶望に打ちひしがれた女たちの悲哀に満ちた啜り泣く声が絶えず聞こえてきており、それは止む気配がなかった。

「うぅ、うぅぅ･･････」

「ひっく、こわい、怖いよぉ･･････」

「なんであたしがこんな目に･･････」

「うぅぅ･･････おかぁさん、おかぁーさん･･････」

女たちは、みな泣いている。涙を流し、身体を震わせながらシクシクと。この先、どれほど恐ろしい目に遭うのかと恐怖して、彼女たちは嗚咽せずにいられなかったのだ。

　ただ、唯一例外がいた。牡丹である。同じ境遇に遭う女性たちが泣きじゃくるなか、牡丹だけが唯一、例外として、嗚咽するどころか一筋の涙も流していなかったのである。これはおそらく、覚悟の差であろうか。供物巫女として、幼き頃から心身を捧げる覚悟を培ってきた牡丹だけが、泣きもせず、喚きもせず、涙を流すこともせず、意思の強さを感じさせる面差しで前を見据えていたのだった。

　牡丹の視線の先には、禍々しい気配を漂わせる鬼たちの根城がすでに見えていた。

鬼たちに乗っ取られた城は、山に寄生するように築城された山城であり、堀やら柵やら塀などが二重三重と敷かれた堅固な造りとなっていた。山頂には立派な城郭が建てられており、居館や倉庫などが山肌に沿うようにして雑然と配置されている。かつては堅牢な守備を誇っていたに違いないが、鬼たちの尋常ならざる力の前には無力だったようである。

　城に近づくにつれ、無数のカラスの鳴き声が聞こえてきた。それに伴って、なんともいえない悪臭が、不吉を伴って漂ってくる。そのあまりにも酷い臭いに、女たちは思わず泣くのをやめ、鼻をつまんで顔をしかめた。

「な、なに、この臭い･･････」

「ひどい臭い･･････」

「うぅ、臭い、くさい･･････」

その臭いの正体がなんであるか、女たちはほどなくして知ることになる。

　女たちを乗せた荷車が城の城門をくぐった瞬間、女たちの口から悲鳴があがった。

「きゃああぁあぁあぁあぁぁああぁあぁッッッ！」

「ひいいぃいぃいいぃいぃぃぃいぃぃぃッッッ！」

「いやあぁあぁあぁああぁぁぁあぁぁぁッッッ！」

　悲鳴を上げる女たちが目にした光景は、この世のモノとは思えぬ凄惨な景色だった。

死体、死体、死体･･････かつて人であった残骸が、見渡す限り一面に――城内のいたるところに散らばっていたのだ。

　四肢を切断された胴体が槍で串刺しにされて並べられており、無数の手足が入った大きな亀が幾つもあった。荒縄で首を吊るされた死体が風に吹かれて揺れており、切断された頭部があちこちに山積みにされている。かつては洗濯物を干していたであろう物干しには、綺麗に洗浄された内臓が干されていて、肉がこびりついた脚の骨や肋骨などがいたるところに散乱している。大皿には切断された男性器が山積みにされており、繰りぬかれた眼球が干からびて転がっていた。砕かれて髄を啜られた骨、脳みその一部、捌かれた肉などが木の板の上にあり、それらはどうやら調理されて喰われたようだった。捨てられた屍肉には数えきれないほど大量の蛆が湧いており、蠅の大群が不快な羽音を立てながら飛び回り、カラスの大群が群がっている腐肉をついばんでいる。その光景は、まさに地獄そのもの。流血の痕跡もいたるところに残されていて、かつてこの城で恐ろしい大量虐殺が展開されたであろうことは明白だった。

　そして、それを実行したであろうモノたちが、女たちの到着と同時に城内のいたるところから現れたのだ。

「グハハハハ！　女ダ、女ガ来タゾ！」

「イッパイ来タナァ。グヒヒヒ、コレデ当分ハ愉シメソウダ！」

「ドウヤッテ犯シテヤロウカ。内臓ヲ抉リダシテ直接子袋ヲ犯シテヤロウカ」

「ヒヒ、食イチギッテヤル、犯シナガラ、乳ヲ食イチギッテヤルゾォォ」

なと言いながら、鬼たちが集まってきた。

　運ばれてきた女たちに群がる鬼たちは、熊よりも大きな個体のモノから、子どものように小さな個体のモノまで、肌の色、頭に生えている角の数など、大きさや姿形はさまざまであったが、どの個体も全身の筋肉が大いに盛り上がっており、耳まで裂けた大きな口には鋭い牙がずらりと並んでいて、見るからに残忍で恐ろしい見た目をしていた。

　鬼たちはみな笑っていた。残忍な笑みを顔に浮かべて、ニタニタ笑っていたのである。目をギラギラと輝かせ、舌なめずりをしながら、恐ろしいほどの笑顔を作って、女たちに視線を向けていたのだ。

　その恐ろしいほど満面の笑みを向けられた女たちは、恐怖のあまり、半狂乱になって泣き叫ばずにはいられなかった。

「いやあぁあああぁあぁあぁぁぁぁあぁッッッ！」

「たすけてッ、たすけてえぇえぇぇぇッッッ！」

「おかぁさーんッ、こわいよぉーッ、おかぁぁさあぁあぁぁんッッッ！」

「いやあぁあぁぁぁッッッ！　な、なんで、なんでアタシがこんな目にいぃいぃいっぃぃぃッッッッ！」

泣き、叫び、悲鳴をあげながら互いに抱き着いて、滝のような涙を流しながら失禁し、しょんべんを垂れ流しながら失神してゆく女たち。彼女たちの恐怖と絶望がどれほど凄まじいか、その恐慌ぶりを目の当たりにすれば想像も容易いだろう。自分たちの絶望的な未来を間近に感じてしまったのだから無理もない。

　その時だ。ひとりの娘が、颯爽と荷車から飛び降りたのは。その瞬間、場の空気が停滞し、鬼たちが息を飲む音がした。荷車から飛び降りた娘があまりにも美しく、また尋常ならざる豊満な肉体の持ち主であったため、鬼たちは目を奪われて魅了されてしまったのである。

「ナンダ、オマエ･･････」

「何者ダ･･････」

圧倒的強者であるはずの鬼たちから漏れでた言葉は、動揺や困惑に属する類の発語であった。

　一方、驚く鬼たちとは対照的に、荷車から飛び降りた娘の方は、恐れもなければ怯えもなく、曇りのない表情で取り囲む鬼たちを静かに見据えると、凛とした態度で口を開いたのだった。

「あなた様方に、ひとつ、ご提案がございます」

「提案？　提案ダト？」

「コノ状況デ俺タチニ意見デキルトハ大シタ度胸ダ」

「ソノ意気ニ免ジテ聞イテヤロウ。言ッテミルガイイ」

「はい。このわたくしめが、あなた様方の相手を一手に引き受けますので、ほかの女性たちには手を出さないでいただきたいのです。ご了承、いただけないでしょうか？」

娘の申し出は、鬼たちにとって予想外の提案だったに違いない。一瞬、唖然とし、互いに顔を見合わせる。娘の真意を測りかねたのか、一体が質問を返した。

「オ前、ヒトリデ俺タチノ相手ヲスルト言ウガ･･････ソレハイッタイ、ドウ相手ヲシヨウッテンダ？　言ッテミロ」

発言を促された娘は、衣装のうえから自分の大きな乳房をぎゅっと掴むと、布越しに細い指を乳肉に埋めながら、相も変わらぬ凛とした態度でもって鬼たちに告げた。

「わたくしの肉体すべてを使って、あなた様方の欲望を一手に引き受けます。穴という穴のすべてを使って、あなた様方の猛り狂う肉棒を呑み込み、鎮めますと同時に、すべての精を受けて浄化したいと思います。いかがでしょうか？」

それを聞いて鬼たちの間からドッと大きな笑いが起こった。

「グハハハハ！　コイツハ面白イ！　オ前ヒトリデ、俺タチ全員ノ相手ヲシヨウッテノカ？」

「オ前、ソレ本気デ言ッテイルノカ？　正気カ？　ソレトモ阿呆カ？」

「ドチラニセヨマトモジャナイコトハ確カダナァ！　グハハハハ！」

鬼たちが爆笑するのも無理はない。鬼たちの数は多く、体格も屈強なモノたちばかりだ。その全員を相手にするのは、同人数の男性を相手にするより無謀であって、荒唐無稽な話に聞こえたからだ。

　しかし娘は本気だった。大声で笑われても怒りもしなければ顔を真っ赤に染めて反論もせず、鬼たちが鎮まるのをじっと静かにまっている。

　その様子を見て、先ほど質問した鬼が興味深げに聞いてきた。

「奇妙ナ娘ダ。自分カラ犠牲ニナロウトハ。人間ハ利己的デ卑怯ナ連中バカリダトイウノニ･･････オマエ、名ハナントイウ？」

「清条牡丹と申します」

それを聞いた瞬間、鬼たちの笑いがぴたりと止んだ。

なにか思うことがあったのか、声を潜め、囁くように言葉を交わす。

「清条？　清条ダト？」

「アノ「女」ノ子孫カ･･････」

「ナルホド。ドウリデ･･････」

などと得心がいった様子で笑うのをやめる。それから、牡丹に名前を聞いた鬼が、代表して提案に応えた。

「イイダロウ。オ前ノ提案、ソノ勇気ニ免ジテ受ケテヤロウ」

「本当ですか」

「アア。タダシ、オ前ガ俺タチノ凌辱ニ耐エキレナケレバ、スグサマ他ノ娘タチヲグチャグチャニシテヤル。イイナ？」

「わかりました。どんな目に遭おうとも、どんな酷いことをされたとしても、わたくしは必ずや耐えてみせます」

「ソレハ愉シミダ」

鬼はニタリと笑って、牡丹を城の奥へと連れていった。残された他の娘たちは、ガタガタと震えながら、この予想外の出来事を見守ることしかできないでいた。

　　　　　　　　　　　　　･･････続きは本編でお愉しみください。